

滿鮮諸族の始祖神話に就いて (二)

——その境域性と歴史的意義の究明——

三 品 彰 英

第五項 降 下 型

卵子が天上より光と共に降下したり、或は太陽によつて出産されたりすることは、こゝでは結局天神或は太陽のみの降誕する一つの様式であるが、然し日のみ子の降誕必しも卵生の形式のみによるのではなく、後述する感生型もその一であり、又卵子以外の容器によつて降る類似の神話が少からず語られて居る。その若干を例示して見よう。

第二十八例、新羅の金氏始祖閼智の出自神話。

「王夜金城の西始林の樹間に鶏の鳴聲あるを聞き、遲明瓠公を遣はして之を視せしむるに、金色の小櫛の樹枝に掛れるありて、白雞其の下に鳴けり。瓠公遽り告ぐ。王人をして櫛を取らしめてこれを開くに、小男兒の其の中に在るあり、姿容奇偉なり、上喜んで左右に謂ひて曰く、此豈天の我に遺すに令胤を以てするにあらざらんやと、乃ち收めて之を養ふ。長するに及んで聰明智略多し、乃ち閼智と名づけ、その金櫛より出でしを以て姓を金とす。」(三)

國史記、新羅本紀第一)

なほ別傳(三國遺事、王曆第一)によれば、金嶺降下の有様を「瓊公夜月城の西里を行くに、大光明を始林の中に見、紫雲の天より地に垂るあり、雲中黄金の積ありて樹枝に掛かり、光嶺中より出づ。亦白雞ありて樹下に鳴けり」と語つて居る。白雞は日の神の祭儀或は神話には常によく結び付いて居る要素であり(Frazer, J. G., (ed) p. 621)、且金嶺中の神子が夜明と共に迎へられる點よりして、それが日の御子の出現であることを推定せしめる。

第二十九例、臺灣のバイワン族トクブル社の始祖神話。

「昔祖先のタバランにありし時、太陽の光線細くなりてカトモアン山に當りぬ。不思議なれば行きて見るに其所に一つの壺あり。其をタリマラオ家に携へ歸りて安置したるに、間もなく其の壺破れて中より一人の男兒産れたり。其をタキバリチ・マダララップの兩家にて乳を與へて育てたるに、成長して今タリマラオ家はラバルの大頭目にして、バブルガン家はブツルの大頭目なり。」(前掲蕃族調査報告書、排灣族)

第三十例、同バリヤン社の始祖神話。

「昔カトモアン山にイナランと稱する所あり。或者其所に到りしに一箇の壺あり、珍らしければ蕃布に包みて携へ來り……タバランに運ぶ。偶々家人窓を閉ちて互に虱を取りつゝありしに、日光壁を通じて其壺に當りしに、壺破れたり。然るに中より二人の男女出でて伺へり……。」(同右)

第三十一例、同社の始祖神話。

「太古石の中より出でたるタムルガンと云ふ者、カトモアン山に登りしに、デロンと稱する小壺天より降り來れ

り。間もなく其壺に太陽の光線當りたるに、中より二人の小兒現はれたり。全く不思議なれば、かの二子を拾ひ取りて養育し、一人をタイルと名づけ、一人をトリトと名づけたり。其者長じて異彩を放ちたれば、頭目の地位に居らしむ。之れ即ちラベル蕃ラウツウ家の祖先なり。〔同右〕

右のバイワン族の始祖神話三個は同一神話の別傳であり、臺が日光と共に降下し、或は臺に日光があたりて神子が出誕するなど、それが日の御子の出現なることを語るものである。

第三十二例、臺灣のブヌン族東埔社の始祖神話。

「昔天上より夕顔（ビタルホル）落ち來りしが、其中にソツカルとて羽の生えたる蟲あり、其者變形して人間となる。間もなく子孫繁殖して四方に離散し南投街方面に赴きし者あり、之れ即ち我等の祖先なり云々。」（臨時臺灣舊慣調査會第一部、蕃族調査報告書、武崙族前篇）

第三十三例、同、バハフル社の始祖神話。

「太古ラモガナと稱する所に一つの瓢箪と一つの土釜ありて、瓢箪の中よりは男出で、土釜の中よりは女出でけり。其後二人みとのまぐはひして子孫の數多く得たり。」〔同右〕

第三十四例、佛領印度支那西北境ワ族 Wa の始祖神話。

「一つの瓢みのりて地上に落ち來りて破れ、その種子、象・野牛・犀などのところに散布せり。ワ族はこの種子より生れ出でたるものなり。」
（註八）

右第二十八例以下の諸例に於ては、さきの卵子の代りに、壺、壺、瓢などが始祖の容器として神話されて居る。朝

鮮には瓢から始祖の出誕する話はない様であるが、かの赫居世の卵に就いて「辰人謂瓠爲朴、以初大卵如瓠、故以朴爲姓」と云ひ、またその降臨の地なる閔川楊山村に關して「閔川楊山村……長曰調平、初降于瓢^〇崑^〇峯」とあり、始祖の降臨と瓢とが觀念的に無關係でなかつたことの名残りを示して居る。又瓠公の話も瓠に關するものとして注意してよからう。さてこの瓢をはじめ甗壺などは卵子と共に、天降る日のみ子の容器たる點に於いて、共通した意味を持つものであつた。既にパツリイが指摘して居る様に、^(註九)インドネシア方面には「日のみ子」の信仰と神話が榮えて居り、この

點臺灣も朝鮮も同様にして、特に臺灣や朝鮮には前述の如く、日のみ子が容器に入つて降下すると云ふ神話が多く流布して居る。この場合卵子は結局瓢、壺、甗に通ずる容器であつて、日のみ子の容器が卵子に限られねばならぬ必然的な理由は認め難く、従つて日のみ子の卵子てふ神話觀念を、その形狀より太陽と卵子との聯想に基くものとする所説の如きは、全く根據のない主張である。吾人は、卵子や壺や甗などの奥に、廣く神子或は祖靈の「容器」てふ根本觀念があり、卵子はかゝる基礎觀念の特殊化された一例に過ぎないと云ふことを先づ以て認めてかゝらねばならぬ。

これから聯想されることは、朝鮮や臺灣蕃族の間で瓢、壺、甗、榘李或は包みの類が祖靈の容器として奉安されたり、又天降る祖靈を迎へ納める聖器として、祭儀的に使用されて居ると云ふ顯著な民俗である。神話と儀禮との考察は、本論考の目的でないから、右に云ふ祭儀實修の事例を一一掲出することは省いて置くが、少くとも斯の如き儀禮上の神靈の容器が、かの始祖神話の神子の容器と觀念的に相通づるものなること明かである。が然し卵子が甗甗などの様に、儀禮的に使用されて居る事例は、朝鮮でも臺灣でも、寡聞の故か吾人はこれを知らないのであつて、この點

卵子は壺櫃包の類とその事情を全く異にして居る。若し神話の成立が一面儀禮と近密な關係に於いてあるとするならば、これは看過されない相異點としなくてはならぬ。總じて神話觀念としての卵子は廣く榮えて居るが、これに對比して卵子が信仰の對象として、或は又儀禮上の聖器として取り扱はれて居る例は至つて僅少で、ギリシヤのオルフェウス Orpheus の宗儀に見られるものなどその僅かな例があるに過ぎない。(註一〇)

斯く朝鮮や臺灣に於いて、神靈の卵子は、單なる神話上にのみ見られる觀念的存在であり、他方壺や櫃の類が實際的に儀禮に結び付いて居たとすれば、後者が前者よりも、部族生活と基本的な結び付きを持つて居たと見るべきであり、従つて卵子はこの壺や櫃に準すべき第二義的な地位にあるものであつた。而して卵生素素の分布中心がインドネシヤ方面にあり、且つその卵生素素が朝鮮臺灣では基本的な壺櫃などの類と同じく特異な降下型に於いて語られて居たとすれば、卵生素素が壺や櫃の神話に同化したものと云へよう。即ち該境域内に於ける降下型の卵生神話と瓢壺櫃などのそれとの比較によつて吾人の教へられるところは、降下卵生神話は卵生神話本來の形相であるのではなく、後者即ち瓢壺櫃の話に準じたものであり、従つて卵生觀念の純粹性は寧ろ他の型に於いて求む可きであるてふことである。この意味に於いて次にインドネシヤ方面の鳥卵型が吟味されねばならない。

第六項 鳥 卵 型

始祖の卵子が天上から降下したり、太陽が産んだりするのではなく、鳥類によつて産卵されると云ふ話の方が、卵子の出現としては寧ろ自然的である。この鳥卵型の話は上掲の諸例ではインドネシヤ・メラネシヤ及び印度に見られ

るが、今これだけの僅少な例数からは、その分布を確定的に論ずることは固より不可能である。たゞ漠然とした傾向を云へば、この型は卵生神話境域の中心域に濃厚であるだけでは充分に云ひ得ると共に、このことは鳥が産卵すると云ふことの自然さと併せ考へられねばならぬ點である。そこで問題を卵から鳥に移すに、何人も先づ大地の創成及び人祖の出現に際し、一般に鳥類が主要な役割を演じて居ることを語る神話が世界的に廣く行はれて居るてふ事實に氣付くであらう。その例若干を示さう。

第三十四例、スマトラのトバ・ベタク族 Toba Battak の神話。

「七天界の最上層にゐます最高の神ムラダイアデ Mula Dyadi は二羽の鳥もて使者となし、初めに三人の男子を造らしめ、次に天界の最下層に一本の木を生ぜしめ、一羽の牝雞をつくりてその木の上に卵子三個を産ましめたり。

やがてこの卵より三人の乙女生れ出でたれば、この乙女をさきの男子に婚ひせしめしに、その内なる一人の乙女婚ひするを好まず、たゞ一人絲紡ぎに専念し居りしが、或日、天界より下界に紡經を降して、それをつたひて下界に達しぬ。下界は未だすべて水もて掩はれてあり、たゞこの原初の海原に一匹の大蛇泳ぎ居れり。この乙女、鳥の使ひによりムラダイアデの神よりもたらせる一握りの土をその大蛇の頭上にひろけて、次第にこの大地を形づくりぬ。……」(Dixon, L., [a] p. 160-1.)

第三十五例、北ボルネオの神話

「この世の初めはたゞ擴がれる大海のみなりしが、その上に二羽の鳥來りて、水に跳び込みて卵子の如きものを持

ち上げたり。それにより一の鳥は天空を、他の鳥は大地をそれぞれに創造せり。〔*op. cit.* p. 156.）

第三十六例、サモア Samoa の神話。

「タンガロア Tangaloa なる神（ポリネシア人のジュピター）天界にありて、下界の涯しなき海原に、たゞ一つの浮べる石あるを見、それにて人の形をつくり、生命を吹き込みて妻となせり。その妻一羽の鳥を生みしかば、タンガロアの神その鳥を下界に遣し……（色々なる過程を経て）……國土を創成せしめたり。〔*op. cit.* p. 18.）

なほ次の如き同系の神話が語られて居る。

「はじめ下界は大海原なりしがタンガロアの神ツリ（鵜）の姿せる乙女を降してその休むべき場所を求めしめたり。この鳥形の乙女は長く水の上を飛び廻りたる後、遂に水面に露出せる岩を見出しぬ。……かくて後この鳥女によつて大地はじめ人類まで總べて創成せられたり。〔*op. cit.* p. 29.）

第三十七例、ニュージールランド New Zealand の神話。

「原初の大海の上を大鳥の飛び居りしが、この鳥海の上に一個の卵を落しぬ。その卵破れて二人老いたる男女と小舟現れ出でたり。……〔*op. cit.* p. 20.）

この系統の神話としては、ハワイでは一羽の鳥來りて原初の大海に卵を生み、その卵自然に破れて世界が生じたと神話し、ソサイティ群島でも類似の神話を語つて居る。

第三十八例、ニューブリテン New Britain のバーニング Baining の神話。

「最初この世界には日と月とのみありしが、この二人婚ひして石と鳥とを産みたり。かくて後その石は男に、その

鳥は女に化し、やがてこの人達によりてベーニングの人々は生れ出でたり。〔op. cit. p. 110-112.〕

第三十九例、ボルネオのバーラム Baran 地方の神話。

「イリ Iri とリンゴン Ringgon と云へる二羽の鳥來りて土地、草木、動物を造りたる後、人間を造らんとて、最初粘土にて造りしも失敗し、次に木材にて造りしが再び失敗しぬ。最後にカムボン Kumpong と呼ぶ木にて男女各の一人の形を試みて成功し、彼等はこのすばらしき出来榮えを感嘆して久しき時をすごしぬ。やがて再び多くの人間を造らんとせしが、その最初の型を忘れしかば、辛うじて低級なるもののみを造るを得たり。かくて造られしものはマイアス(猩々)と手長猿の祖先なりき。〔op. cit. p. 174-5〕

この種の類話は他にも少くなく、イバン Iban やサカラム Sakaram のダイアク族の間にもあり、こゝでは三度目に粘土を用ひて成功することになつて居る。スマトラのバタク族の間では最初の人間は、空から遣はされた羽毛のない鳥から生れたと語つて居る。

右の第三十四例以下の諸例は、それぞれに特殊な要素と構想を持つて居るけれども、何れも天地及び人間の創造に當り、鳥類が主役を勤めて居ると云ふ點に注意して掲出したもので、主としてディクソンの謂ふ創成型 creation type に屬するものであるが、今この種神話に於ける鳥の役割に注意を向ける時、それはインドネシア・メラネシア・ポリネシアなどの南太平洋諸島民族間に限られて居るのではなく、印度やフィランドのそれをはじめ、殆んど世界的に存すると云つて過言でない普遍的要素である。参考として滿鮮に近い大陸に於ける例二三を引用して置かう。

第四十例、シベリヤのエニセイ・オスチャク族 Yenisei Ostiaks の神話。

「世のはじめは水ばかりなりしが、偉大なるシャーマンのドーDoh、白鳥うみ鴨その他の水鳥を伴ひてこの水上をたゞよひ居たり。かのシャーマン一つの休む場所を見出すや、まづ潜水鳥に命じて海底より一塊の土を持ち來らしめしに、彼遂に三度目に成功せしかば、それにて海中に島を造りたり。……」(Holmberg, U. p. 323.)

第四十一例、シベリヤのブリヤート族 Buriat の神話。

(神)

「原初 of 海原の上にソムボルブルカン(Sombol Burkhan)渡りてありしが、十二の雛を伴ひて泳ける水鳥のあるを見て、『水鳥よ、もぐりて土を持ち來れ、汝が嘴もて黒き土を、汝が脚をもて赤き泥』をと命じて土の素を得たれば、神こゝに赤き泥を水の上に、その上に黒き土を撒けり。斯くて美しき草木の生ひ繁れる大地は成りぬ。よろこびて神は『汝多くの雛を持ち永久に泳ぎてあれ、深く潜りてあれ』と水鳥を祝福せり。これこの鳥の深く潜る不思議なる力を持ち長く水中にあり得る所以なり。」(op. cit. p. 324)

この種の類話は中央アジアをはじめ廣くアルタイ系諸族の間に語られて居るばかりでなく、遠くアメリカ大陸に於けるインデヤンの創成神話の一つの類型ともなつて居る。原初の海てふ觀念がシベリヤや蒙古の如き大陸内に發源したとは考へられないが、その源流が何處にあるにせよ、天地人祖の創造に於ける鳥の役割は原初の海の觀念と共に、かくも廣く世界的に分布して居り、従つてこのことは這般の要素の古く且最も基本的なることを示唆して居るものと云へよう。特にインドネシアからポリネシアにかけてこの種神話は最も榮えて居り、その鳥類の演ずる役割の種類も亦甚だしく多様である。土掲の僅かな例に就いて見ても、第三十七例では鳥卵から天地が生じ、第三十六例では神の子な

る鳥が國土や人類を造り、第三十五例では海中より鳥が天地を造る原素を持つて來、第三十九例では鳥が人祖を創製し、第三十八例では鳥が女に化して人祖となり、第三十四例では鳥が最高神の使者であると共に、創造の天女がその鳥の卵子から生れて居る。なほ右には引用しなかつた例であるが、インドネシアのアムボイナ Amboina, ブル Burn の諸島では、鳥が止つて結實させた^くる^みから人祖が生れ出ると云ふ一寸變つた鳥の役割を語つて居る。

上掲の神話は、總じてこれを云へば、天地及び人祖の創造神話に於ける鳥の役割と云ふ一般的な基本觀念が、部族によりそれぞれの特相を以て語られて居るのである。而して原則的に云つて、特相の分化率は、この種神話の最も榮えて居るところに於いて又大なりと云ひ得べく、この意味でインドネシア方面はその分化率の甚だ高い境域として注意されねばならない。かくてこゝに這般の基本觀念よりの特相の一として鳥の卵子を以てする鳥卵型の神話なるものを理解することが出来る。最初如何にして創造神話に於いて鳥類が斯の如き主役を演ずるに至つたかは、吾人の當面の問題でなく、こゝではたゞかゝる普遍的觀念に基く一特殊相として、鳥卵人祖神話派生の可能を理解し得れば足るのである。且この派生が何處に最初起つたか、又一ヶ所であつたか、二ヶ所以上であつたか、これらも亦決して難い問題であるが、右の如くインドネシア方面に高度の分化率の存する事實から該方面に於けるその可能を充分に豫想せしめるものである。

次に化生型である。化生の觀念は原始人に普遍するものであり、この觀念と卵生要素の結合がこゝに云ふ化生型である。且この型は宇宙卵神話と聯關するところ少くなく、例へばブラーマンの宇宙卵神話と比較すれば、この點は何

人も氣付くところであらうが、しかしこの問題に就いては、こゝでこれ以上論考することの關心も薄く、又族祖卵生神話の中心問題でもないと考えざるが故に、この一言のみで止めて置かう。

第七項 人態の出産型

人態の出産型の卵生神話は二つの點に於いて、即ちそれがインドネシヤを中心とする海洋境域と支那大陸との接觸境域に見出されると云ふ分布的特徴と、他方少からず進歩せる神話的觀想をもつて語られて居ると云ふ内容的特徴とに於いて、前三型と甚だしく相異して居る。卵生神話が支那大陸内部には一もなく、右の如き分布的特徴を持てるとは、その内容的特徴と共に、この種神話の要素と構想が、インドネシヤ系と支那系との接觸結合になれるものなることを豫想せしめるものである。原則的に云つて、インドネシヤ的要素でありながら、しかも進んだ構想に於いて語られて居る部分は、インドネシヤ的要素自體の發展形相と考へられ、また別個の新しい要素が添加されて居るならば、その部分は大陸系の影響による結果であると考へて太過あるまい。勿論こゝでの考究は上掲人態型卵生神話の一が持つ特殊要素の總てにわたるのではなく、比較的共通せる要素のみを取扱ふのである。そこで以下考察せられる要素を分析表示すれば次表の如くである。

要素	要 素					
	父(夫)	母(妻)	所 産	棄兒的要素	拾 得 者	神子の業績
脱解の神話(第十八例)	龍城國王	王妃(龍女)	一 卵	棄、漂流	老 女	建 國

パロウン族の神 話(第二十二例)	天神の子	龍姫	三卵	棄、漂流	夫婦	建國
朱蒙の神話(第十九例)	天神の子	河伯の女	一卵	棄	母	建國
徐偃王の傳説(第二十例)		宮女	一卵	棄	老母及黃龍	建國
般遮羅國の神話(第二十七例)		王妃	五百卵	棄、漂流	國王	
メン マオ國の 神話(第二十一例)	牧童	龍姫	一卵		父	建國
タツーン國の神 話(第二十三例)		龍	二卵		王子	建國
ウイン マイ國 の神話(第二十四例)	天神の孫	龍姫	一卵		虎	建國
安南王の神話(第二十五例)	王子(龍君)	龍女	百卵			建國
西藏王の神話(第二十六例)	日色の男子	王妃	一卵			國家再造

この型に屬する神話は何れも窮極に於いて王都を建設したり國家を創建したりした建國の王者や國家的英雄の出自を語つて居り、この點兩餘の型の殆んどが人祖乃至族祖の出現を語つて居るのと相異して居ると云ふべく、且このことはこの神話が國家的に或る程度の發展段階に達した社會に於いて、王者の權能に結び付いて發展したことを示唆し

て居る。事實それを傳承して居るものは、高句麗・新羅・徐・安南・シヤン諸國・般遮羅・西藏などの諸國にして、何れも名の知れた古代王國であり、且それは各王國の史籍の内に、即ち三國史記高句麗本紀・同新羅本紀・徐僂王志・大越史記・パロウン年代記・センウィ年代記・蒙古源流などの内に王國の歴史の第一頁として語られて居るのである。さうした所傳が神靈の世界を語る他の型の神話よりも、歴史的に、従つて著しく人間的觀念を伴つて來るのは當然であり、特にこの發展が支那文化との接觸によつてますます促進されたであらうことは想像するに難くない。

人間的觀念發展の跡は、卵子が人間的母親によつて出産されると云ふ點、及びその前件として父母たるべき男女の成婚を語れるところに最も明瞭に窺ふことが出來、又それはさきの三型には全く見出し得なかつたところである。なほ詳細に云へば、左の十ヶ例の内母親の存在はすべて明瞭で且話の中心をなして居り、父親に關して云へば、内七ヶ例は明瞭であるが、第二十、第二十三、第二十七の三例だけは、その存在が明らかでない。このことは母の存在が父よりも基本的であり、且はその人態化の過程に於いても母親の先行を想はしめるものである。父親は、右の七ヶ例では、天神(太陽)のみ子(第二十二例、第十九例)、天神の孫(第二十五例)、日色の男子(第二十六例)、國王(第十八例)、王子(第二十五例)、牧童(第二十一例)などとなつて居るが、天神或は太陽のみ子とするのがその基本形相であつたと推測され、白色の男子とある白色は日神のシンボルであると解されるし、又この境域に於いては國王や王子は常によく「日のみ子」の觀念と結合されて居るから、何れも「日の子」の變形と見做すことが出來よう。卵子と太陽との關係は他の型の卵生神話就中その降下型に於いて多く見られ、即ち光りと共に卵子が降下し(第一例)、太陽が來つて卵を産

み(第三例、第四例、第五例、第七例)、卵子が日光によつて孵化され(第八例、第十二例)、天神が卵子を創製し(第十五例)、或は日神の創造した白鳥が卵子を産む(第十六例)などと語られ、又光と共に慣や壺が天降つたり(第二十八例、第二十九例)、日光が壺にあたつて中から子供が生れたり(第三十例、第三十一例)する話もこゝに取りあけてよい例である。この降下型に於ける太陽なり日光なりは生成の源泉としての力であるけれども、未だ父とか母とかに人態化されざる以前の形相に於いて語られて居るが、人態型に於いては太陽は人態的に觀想され、且父の地位に置かれるのが普通である。太陽(日光)から人態的存在への過程を興味深く窺ひ得る例として、高句麗の朱蒙神話の異傳の比較を指摘しよう。即ち簡單な所傳の一である魏書高句麗傳には「河伯女、爲夫餘王閉於室中、爲日所照、引身避之、日影又逐、既而有孕」とあるに對し、舊三國史の所傳に於いてはこの河伯の女に通するものを天帝の子と呼び、その天より降る姿を「乘五龍車、從者百餘人、皆騎白鶴、彩雲浮於上、音樂動雲中、止態心山、經十餘日始下、首戴鳥羽之冠、腰帶龍光之劍、朝則聽事、暮即升天、世謂之天王郎」と敘し、つゞいて河伯の女との成婚の様子を物々しく物語つて居る。斯の如きは日光と云ふ原初的觀念の跡をとゞめつゝも、すばらしく人態化的形容を敢えてしたものと言へよう。

次に母なる存在に就いて見るに、龍女、龍姬とせるもの(第二十例、第二十一例、第二十三例、第二十四例、第二十五例)、東海中の女王國(龍女國と推定される)の女とせるもの(第十八例)、水中動物の型態をとる河伯の女とせるもの(第十九例)、宮女或は王妃とせるもの(第二十例、第二十六例、第二十七例)など色々であるが、そのうち宮女王妃

とせる三例は人態化の最後の段階にあるものと考へられ、爾餘の水中の神女特に龍女とあるを以てその一般形相と見るべきである。然しこの龍女なる觀念は人態型に於いて初めて新しく加へられたものではなく、既にさきの降下型や鳥卵型に見られた蛇が、こゝに人態化されて居るに外ならない。創世神話に見られる普遍的觀念として、天乃至神に對する原初の海洋なる觀念の存することこゝに改めて例擧するまでもないが、そもそもこの海洋は生成の源として、恰も天に對する大地母と類位的地位にあり、謂はゞそこに水母的性能が觀念されて居る。第十二例に、原初の海洋の波が打ちあけられて卵子型の泡が出来、それが太陽の光に輝きられて孵化すると語つて居るところなど、母としての水界が未だ人態化されざる以前の形相にあるものと云ふべく、又第九例の、これは鳥卵型であるが、卵子が水源と川口に置かれるところにも水界との關係をかすかながらにも示して居る。が又第十五例の原初的大海に泳いで居る大蛇の頭上に土地が出来、そこに卵子が発見されると云ふ神話が示して居るやうに、原初的大海に最初より唯一あるものとしての大蛇は、水界より分化せるもの或は水界を具象せるものと云ひ得べく、這般の大蛇の神話要素は單に卵生神話に限らず、諸神話を通じて廣く流布して居り、右の第十五例はその一に過ぎないのである。この意味から大蛇を水母的存在の代表と見て大過なかるべく、從つてその發展相の一として、大蛇が卵子に對して母の位置にあることをも理解するに難くならう。第三例の太陽の産んだ卵をブロンと稱する蛇が來て孵化する話、第十例の鳥の産んだ人祖卵をデンゲイと云ふ大蛇が孵化する話なども、右の理解を助ける例であり、第四例では太陽の卵子を大蛇が現はれて呑むことになつて居るが、これなどは大蛇の役割が何かの事情で歪曲されたものと考へられる。第一例では卵生の神

童赫居世の妃が井中の雞龍から出誕生して居るが、神話の上では母と妻の地位が可通的なるを以て、これは上述の考へからも注意されてよく、且雞龍てふ觀念はその類例は稀少であるが、例へばアメリカインディアンのキチエ族 Kiche の創世神話に見える鳥蛇 Bird serpent の觀念(Spence, L., 147.)に一致して居り、一般創世神話に於ける原初的な存在たる鳥類と蛇との二要素がこゝでは結合して雞龍など云ふ特殊な觀念になつて居る點にも興味がある。斯の如き卵生神話に於ける龍蛇の觀念が、進んだ神話觀念と出會ふ時、その人態化が著しく促進されるであらうことは想像するに難くない。

次にこの型にのみあつて、爾餘の卵生神話には見られない棄兒的要素の問題である。この要素はひとり卵生神話に限られて居るのでなく、かのロムルス兄弟やペルセエやモーゼの話、或は支那の例では周室の祖なる后稷の出自神話の如きは人のよく知る例であり、又印度にもこの要素を含むものが少なくなく、その他この類例は枚舉に堪えない程であり、それだけに又この要素に就いて、フレーザーやフロベニウスをはじめ學究的論考を試みた興味深い所論も少くない。こゝに一一紹介するの煩を避けたいが、要するに棄兒觀念の成立を説く見解がしかく多様であると云ふこと自體が、既にこの種要素が各種の神話と結合して、各様の意味を負ふに至つたことを示唆して居り、従つて卵生神話の場合も、その發達したものがこの種要素と新に結合するに至つたものと考へられ、特に棄兒要素の語られることの少くない支那や印度との接觸境域に於いてのみ、棄兒要素を含む卵生神話の見出されると云ふ分布的特徴からも、そうした見解の確率を増すことが出來よう。がしかし問題は必ずしもさう簡單ではない様である。

先づ考へて見なければならぬことは、降下卵生型に於ける卵子が拾はれると云ふ點である。例へば妹が卵子を拾つて米櫃に納めて置いたり(第八例)、國王が拾得したり(第十七例)、また一步進んで村民達が林間で大卵を發見したり(第一例)するのであつて、降下する卵に對して、これを迎へたり拾つたりすることは必然的に隨伴する觀想である。即ち卵生始祖神話に於いて、先づ現はれるものは卵子を拾得することであり、それは棄てることよりも先行的に存して居ると云へる。人態的産卵型の諸例の内でも棄兒要素の明瞭なるものは第十八、第十九、第二十、第二十二、第二十七の五例にすぎず、第二十一、第二十三、第二十四、第二十五、第二十六の五例はこれを缺いて居り、且その内第二十一、第二十三例では龍姫が生んで行つた卵子を拾ふと云ふ話になつて居て、棄ると云ふことよりも拾ふと云ふことのみが明瞭で且重要な點となつて居る。又棄兒の事情に就いて見るに、第十八例、第十九例、第二十例及び第二十七例では、人の産卵を不祥なりとし或は羞として棄てたとあり、第二十二例では龍姫があざむかれたのを怒つて卵子を河中に投棄てることになつて居る。然し前四例は何れも母は人態化の最後の段階にあるもの、即ち王妃乃至は宮女と云ふことになつて居り、従つて卵子を棄てることと母が人であることには必然的な連繋があり、換言すれば母が人態化された結果として、且は又拾ふと云ふ先行要素に應ずるものとして、この棄てると云ふ觀想の發生的意義が考へられるのである。斯く見る時、棄兒的觀念は、卵生神話の人態化の過程に自然的に現はれるものとしても考へ得るのであるが、しかし實際に於いては、支那印度の棄兒型神話に接することにより、その自然過程が促進され教へられたものと解すべきであらう。

第八項 朝鮮の卯生神話の系統

以上卯生神話をその型式と地域性との聯關に於いて考察し、神話の成立過程の一面にまで言及したのであつたが、再び上掲諸例を總體的に眺める時、その間に見られる要素の共有に就いて結論的に一言する必要を覺える。

先づ第一に降下型に於ける朝鮮南部の諸例(第二例、第三例)と臺灣の諸例(第三例、第四例、第五例、第六例)との間に於ける強度の近似、共有の關係である。問題の卯生要素はそれ自體甚だ單純であり、原則的にはかゝる要素の近似のみの持つ傳播指示率は必ずしも大とは云へないけれども、南鮮と臺灣との地理的聯關の近密さを顧る時、その間に直接的な傳播關係を承認することは間違ひない結論と云へよう。しかもその傳播は、佛典說話や支那古典說話の類が朝鮮に輸入されたのとは趣を異にし、この兩地域は文獻的には何等交通の歴史が考へられず、從つてそれは史前的關係であり、又單なる一文化要素のみの交流でもなく、實は民族的に密接な關係を豫想せずしては考へられない相互の關係である。特に資料として扱つた神話が、部族社會と機能的に聯關することの強い始祖神話であることも、兩者の關係が民族的であるとすることの承認を助けるものである。韓族の南方への民族文化關係は、ひとり右の始祖神話要素のみに限られて居るのではなく、他により根本的な關係として、廣く農耕的民族文化の諸要素が指摘され得るのであつて、それは滿蒙の狩獵的牧畜的民族文化要素と對立せるものと云つてよい。稻作などの農作種目は云ふまでもないことであり、又それに關聯する宗教儀禮の比較に於いて、特に又原始社會組織の重要特質である韓族の男子集會組織の如きも、北方とは全く關係なく、獨り南方海洋諸族へのみ聯關して居るのである(拙稿「新羅花郎の源流とその發

展」史學雜誌第四十五編）。しか云へ吾人は韓族の民族關係を南方へのみ強く、一部論者の如く専らに主張するものではない。民族系統と近密な關係にある言語の如きは主として北方への關係を考へる主張が妥當して居るのであつて（小倉進平博士「朝鮮語の系統」『岩波講座東洋思潮』）、こゝで問題として居る新羅の赫居世の神話に於いても、その卵生要素は南方へつながらつて居るに拘らず、その間の神人名例へば赫居世——弗矩内とも書かれ *purkan* と讀まれた——てふ言葉の如きは、北方に連絡する語で、即ち蒙古諸族をはじめシベリヤのツングース諸部族の間に使用されて居る *burkan, borkan*（神）と同系である。従つて僅か始祖神話のみに關しても韓族の古代文化は既に複合的であつたことが氣付かれるであらう。

次に人態型に屬する第十八例以下第二十七例に至る十例を通覽すれば、何人もその間に全體として近似性の強いことにおのづから氣付くであらう。例へば高句麗の朱蒙神話（第十九例）とビルマのパウロン族の始祖神話（第二十二例）との類同の如き、また新羅國脫解王の神話（第十八例）と印度般遮羅國王の話（第二十七例）はじめ多くの同系の佛典説話との類似の如き、何れもこの南北に遠くかけはなれた兩地間の卵生神話の示す近似類同には注意に値ひするものがある。單なる一二の要素でなく、複合的な類同が兩地の間に無關係に偶發することの可能率は至つて低く、何人もその間に同源關係を豫想し得るであらうが、然しそれが如何なる經路と手續によつたか、にはかには決し難い問題であり、個々の場合を吟味すれば事情は必ずしも同じでなからう。右の内脫解の神話と佛典説話との關係は、新羅の佛教全盛時代を考へるならば、そこには最早疑問の餘地はないが、朱蒙神話の場合にあつてははしく簡單には決し難い。

この神話は文獻資料の上ではかの好太王碑に初見するものであり、その古さからしても又その内容からしても、佛典說話よりの取材てふことは考へらるべくもないが、果して然らば濊貊系の高句麗と百越系の印度支那との關係を如何に考ふべきであらうか。この兩者の間に介在する漢族の國家が、滿鮮方面及び越南方面に交渉を持つに至つたのは周末・秦の時代からで、この兩地方へ本格的な遠征が試みられたのは漢武帝の時である。そうして衛氏朝鮮の王儉城を攻略した漢の樓船將軍楊僕はさきに同じく水軍を率ひて越南遠征を敢行して名を得た武將である。かく越南と朝鮮に同じ軍隊が討伐に赴いたとすれば、古代史上の遠征が文化傳播の上に果した一般的な偉大な成果から考へても、それは今の問題に看過出来ない事件である。が然しかゝる歴史的事件を以てする想定よりも、寧ろ左の民族史的事實を以てする方が、族祖神話の關係を考へる上には、より妥當であるまいか。

即ち漢族が未だ黄河楊子江下流域を占領しない以前には、黃海・東支那海・南支那海一帯の沿海境域には東夷及び百越と呼ばれた諸族が占居して居り、淮江二水の邊が南北兩者の接觸地域であつた。そうして前者には濊貊諸族、青州の嶋夷、萊州の萊夷、冀州の島夷、徐州の淮夷徐夷の類が屬し、後者の所屬には於越、楊越、甌越、駱越、山越などの名が顯れて居り、今の浙江以南より安南地方にかけて廣く分布して居た。勿論この兩系の諸族は同源とまでは云ひ得ないまでも、少くとも民族文化的には近密なものを持ち、共に海洋的要素を含む點も同じであつた。彼等は春秋戰國以來漢族の著しい進出の爲に、或は同化され、或は北と南に兩分して押しやられたのであつたが、今かゝる民族移動のおほろけな歴史を顧る時、高句麗と印度支那との神話的類同の原因をもこゝに求めることが出来るではあるまいか。

徐偃王の卵生傳説(第二十例)が所謂徐夷の故地に語り傳へられて居たのはその名残りであり、或は南北を結びリンク的存在として注意されてよくはあるまいか。

以上の推論にして誤りなしとすれば、古くインドネシア・印度支那・支那沿岸地域・臺灣・朝鮮にわたる一聯の境域に卵生神話要素が存し、その内大陸の沿岸境域に於いては、大陸文化との接觸の結果、人態型として發展し、海洋上の諸島や朝鮮半島南部にあつては爾余の型がそれぞれの地方色を以て語られて居たのである。なほ朝鮮に於ける個の神話に就いて云へば、新羅の赫居世王の神話及び加羅の首露王の神話は、臺灣などの南方諸族と要素を共有せる民族的な神話として古くより存したものであり、高句麗の朱蒙神話は上記の境域に所屬しつゝ、漢族に接した獯貊族の原住地より伴はれ來れるものであり、新羅の脫解王の神話は佛典説話が民族固有の卵生觀念にひかれつゝ採擇されたものであると考へ度いのである。勿論佛典説話よりの借用であるとしても、それを採擇する素地として民族的な族祖卵生觀念が先在したのであり、正しく云へば、彼等自らの持てる始祖神話を、佛典説話を借りて自らに成長せしめたと云ふ可きである。同じく韓族間に民族固有の原始的な卵生神話と、佛典的な進んだ卵生神話とが共存して居るところに考察の興味がある。族祖神話の本質からしても、全然他者的なものを簡單に借用するが如きは容易には起り得べきでなく、こゝに族祖神話の民族文化の意義が高く評價せらるべきを示して居る。(未完)

註 1 J. Hackin, "Asiatic Mythology." Cox; "Mythology of the Aryan", etc. 前者の Brahmanic mythology の 1 例を示せば、
"Father of the gods, the demons, and man, after he had constrained himself to great authorities, he created the world by means of sacrifice. From the sweat of his body was formed an egg. During one year it

flouted upon the primordial waters, giving birth at length to the world. The upper half of the sell constituted the firmament, the lower half contained the Ocean." (p. 116—7) ウサヲ類也なる。

註二 Kalevala (Runo I—Birth of Väinämöinen) の歌々を要約すれば、「空の少女が海に下り、そこにて風と波により精を受けて水母 Water-Mother となる、一羽の勿鴨が彼女の膝の上に巢をつくつて卵子を産む、その卵子が巢より落ちてくだけ、破片が大地、天、日、月、雲を形成する、この水母は岬、灣、海岸及び海の深淺を創成し、Väinämöinen はこの母より生れ、久しく波にもてあそばれて居たが、遂に海濱に漂着する」と云ふ筋である。

註三 上ビルマ地方のモンゴロイド諸族の太陽信仰に就いて、フレーザーは次の如く述べて居る。

"Among the mongoloid tribes of Burma, immediately to the east of Assam, a few traces of Sun-worship have been recorded. Thus among the Kachins or Singphos (Ching-paws), a large tribe of Upper Burma, the spirits (*nats*) of the Sun and Moon are worshipped once each year, but only by the chief, who jealously guards the privilege. The ceremony takes place in the cold season. No living thing is sacrificed, but food and drink are offered, the chief begs the spirits of the two great luminaries to protect the whole village. The Palaungs, a tribe inhabiting some of the hills in the Shan States of Burma, profess Buddhism, but like many Buddhists they retain numerous beliefs and practices which have survived from an older worship of nature. Thus, they regard the Sun and Moon as brother spirits so powerful that they are almost ranked as gods. . . ." (Frazer, J. G., (ca) p. 636.)

註四 朝鮮と文化的關係を豫想される方面の説話として注意すべきものに、支那の説話類があり、その間から卵生要素を含む説話類を取付するならば、なほ若干の例を引用することが出来る。一例せば、「新齊諧」卷十二に、

「昔有陳姓獵戶、畜一犬、有九耳、其犬一耳動則得一獸、兩耳動則得兩獸、不動則無所得、日以爲驗、一日犬九耳齊動、陳喜必大獲、急入山自晨至午不得一獸、方俟俄間、犬至山凹中大吠、將足爬地、顛其頭若招引狀、陳疑掘之得一卵、大如斗、取歸

置几上、次早雷雨大作、電光繞室、陳疑此卵有異、置之庭中、霹靂一聲、卵割然而開、中有一小兒、面目如畫、陳大喜抱歸室中、撫之爲子、長登進士、第卽爲本州太守、才幹明敏、有善政、至五十七歲、忽肘下生翅、騰空仙去、至今雷州、祀曰雷祖、てふ傳説がある。また「大南」統志（卷五）三位水將祠にかゝる傳説として次の如きものが語られて居る。

「在和榮縣、愛義社醉翁山之南、有一湖、水極深、中一小阜靈祠在焉、伊社人名黃璘妻阮氏道爲巫、年過五十、未有孕育、一日氏浴于湖、夜夢、湖中越波若有龍形交繞、驚醒感而孕、彌月產出三大卵、黃璘怪之、作竹筏送之江中、至青霞社、忽有風雨、化作三蛇登岸、社人致禮送之、三蛇展在青霞、辰歸在湖、後日長大、每出湖輒風雨、托童子稱三位水將、第一黃湛、第二王黃波、第三黃滑、鄉人立廟祀、最著靈應」

前者は黃海に、後者は安南の南支那海にそれぞれ濱する地方の傳承であり、共に卵生要素を含む點で注意されよう。その他この種の話や、又佛典説話の内にも、卵生要素を有するものがないではないが、然しこれらは何れもこゝで問題として居る始祖乃至人祖の卵生てふ中心點からは離れすぎて居り、且又神話的性質をも失ひ、全くメルヘン化して居るが故に、民族文化資料としては甚だ價值低いものに化して居る。かうした理由から本稿の資料としては、この種の説話傳説類は全然採用しないことにした。

註五 エジプトでは太陽は雙蛇の船に乗つたり、或は地獄の精靈にひかれる船に、智慧と魔法と同乗するものとして神話され、又 Khepri としての太陽は、黃金蟲がその卵子を天空でころがして居るのだと観想されて居る (Max Müller, W., p. 25-7)。
又太陽の出處の容器として蓮花や卵子が神話されて居る。

“As to the origin of the Sungod various stories were told. According to one account, he originated, no one knew exactly how or where, in the great primeval ocean called Nun. Many people thought that he first appeared as a child sitting in a lotus flower which bloomed in the primordial watery abyss. Perhaps the notion may have been suggested by the sight of the Sun rising over the flooded Delta, where lotus flowers spangled the shimmering surface of water. According to another account, the Sun-god was hatched from an egg, which lay in a nest, which

rested on a hill, which rose from the water. Eight primeval mounsters, in the form of frogs and serpents, were present at the birth, and so was a cow. No sooner was the infant god hatched from the egg than he climbed on the back of the cow and, so mounted, swam about in the water. As for the egg, it was not laid by any living creature but fashioned on a potter's wheel by the creator-god Ptah of Memphis. Abydos likewise could point to the birthplace of the Sun. (A. Erman; "Die ägyptische Religion," p. 33. cited by Frazer, J. G., (a) p. 590-1.)

なほ太陽の容器として著明なのはギリシヤ神話の「金色の盃」golden gobletの語で、太陽は晝間は戦車をかこつて天空を駆け、一日の旅を終つて西方の海に沈んだ後、夜中 golden goblet に乗つて地中海を東に、もとの出發點に歸つて行くと語られて居る。

註六 天地開闢に當り、エロス Eros (Pros-Phanes) が卵から生れたと云ふプロスファネスの神話に就いて Guthrie, W. K. C. 著 "Orpheus and Greek Religion" の中を、

"The Egg as the symbol of creation—who was the first to think of this profound allegory. The hunt was up and examples multiplied themselves surprisingly. The Egg was run to earth in India, in Persia, in Assyria, in Egypt, brought in fact 'from the farthest East and even from the icy regions of Siberia and Kamtschatka.' It is not left for us to follow it there. It is not even left for us to take what is logically the next step, though great minds saw it many years ago, and with some it has not even yet superseded the idea of a chain of borrowers. This step is to reflect that in taking the Egg as the symbol of the beginning of life, the makers of myths were after all doing a very simple and natural thing, and if it is common to the stories which many different peoples have made up about the origins of the world, that is really not surprising, and there is no need at all to suppose that they handed on the great thought from one to the other." (p. 92-3.)

と併行發生論者の所説を總括的に略論して居る。彼は “The hunt was up The egg was run to earth . . .” とまで云つて居るが、果してさうであらうか。事實朝鮮や臺灣にまで彼等の狩場は擴められて居なかつた筈である。吾人は宇宙卵にしる人祖卵にしる、それが唯一ヶ所に發生して、各地に傳播したと主張するものではないが、調査が詳細にすゝめられるに従つて、傳播の跡が特定地域内に於いては次第に明瞭になつて行きつゝある。イーソーゴイーングな併行獨立的發生論者の説に一途には従ふ可きでない。

註七 ヘルの卵生人祖神話の一例は既に指摘して置いたが、Chincha の神話にも類同せるものがあり、それによると、「大洪水があつて人間がすべて亡び、たゞ一人のみ高處に登つて助かつた。……この大異變の後に、未だ一人の王もなき時に、五個の卵が Condor-coto と呼ぶ山の頂に出現した。この卵のまはりには風が吹いて居たが、やがて風は止んだ、そうしてこれらの卵こそ Pariacaca 及びその四人の兄弟達の生れ出でしものである。……」とあり、なほこの神人に就いての物語が色々と言つて居る。H. B. Alexander はこの神話の後に所見を付し、“There are the cosmic eggs—perhaps earth's centre and the four wind symbolized in the five of them Pariacaca is clearly a deity of waters, Probably a divine mountain, giving rain and irrigating stream,” と述べて居る (“Latin American” Chap. VII. The Andean South, p. 232)。ヘルー人達の考へによれば、太陽であり、Inca King であり、“the mighty man”を意味する Manco Capac に對して、月であり、王妃王妹である Mama Oello が “the mother egg” を意味して居る。即ちこゝでは卵子は太陽に對する陰性原理を表象して居るのである。右の外メキシコの神話にも卵子から生れた小人の英雄の話があり、太平洋に沿ぶラテンアメリカ地域に於けるインデアンの間には廣く卵生要素が分布して居ることが窺知されるのである。

註八 Scott, Sir J. G. p. 281. なほ同書は東部印度支那に於ける類似した始祖神話に就いて “The Lao people, who inhabit the upper part of Indo-China, north of Siam, Cambodia, and the Saigon country, have the more pagan and extremely common tradition that all the races who now form the population of Eastern Indo-China came out of a melon or pumpkin. This melon grew at Muang T'eng, as the Lao people call it, but which the French, copying

the Annamese, term Dien Bien-phu. This is a high plateau to the north-east of the Nam U, a river which flows into the Mé-khong a little above Luang Prabang." (p. 285-6.) と云ひ、その他の例をも收録して居る。

註九 「インドネシアの巨石文化」に集められて居る一二の例を借用するならば、西南チモール Timor の酋長は「日のみ子」と自らを呼び、中部チモールでは「偉大なる太陽」或は「日のみ子」と稱して居り、又セレベスに於ても同様である。そうした信仰上の事實に應ずる神話として、セレベスのミナハサに於いては、太陽から授かつた箱の中の腕輪から小童が生れたことを語り、臺灣では天降つた石から始祖の生れる語があり、又「東方に石が現はれ、太陽が出るとそれが熱くなつて汗をかき、遂にそれから始祖クミムウト Kumimut が生れた」と云ふトンテムボアン Tontemboan の始祖神話などが指摘される (Perry, W. J., op. cit.)

註一〇 オルフィッスの宗儀に於いては、卵子は密儀的に使用され、生命の原理として信者達には食用にすることをダブーされて居り (Harrison, J. F., p. 627-8)、卵子に關するドクマとしては最も發達したものと云へよう。パウサニアスのギリシャ誌によれば、スバルタの處女神 Hiraeta 及び Phoebe の神殿には大卵が天井よりリボンで吊され、所謂レーダの卵子なりと傳承されて居た (Book III. Laconia CHS. XVI)。

論文中略記した洋書參考書の原名を左に記して置く。

Alexander, H. B.; *Latinamerican, the Mythology of All Races*, Vol. X, Boston.

Boas, F.; "Mythology and Folk-tales of the Northern American Indians," in *Journal of American Folk-lore*, vol. 28, New York, 1915.

Cole, F. C.; *The Wild Tribes of Davao District, Mindanao*. Anthropological Series, vol. XII, No. 2, Field Museum of Natural History, Chicago, 1913.

- Caplicka, M. A.; *Aboriginal Siberia, Study in Social Anthropology*, London, 1914.
- Dixon, L. B.; (a) *Oceanic, the Mythology of All Races*, vol. IX, Boston. —; (b) *The Building of Cultures*, New York and London, 1928.
- Forde, C. D.; *Habitat, Economy and Society, a Geographical Introduction to Ethnology*, London, 1934.
- Frazer, J. G.; (a) *The Worship of Nature*, vol. 1, New York, 1926. —; (b) *Spirits of the Corn and of the Wild*, 2 vols., The Golden Bough, Part V.
- Guthrie, W. K. C., *Orpheus and Greek Religion, a study of the orphic Movement*, London, 1935.
- Harrison, J. E.; *Prolegomena to the Study of Greek Religion*, Cambridge, 1908.
- Hackin, J. and others; *Asiatic Mythology, a Detailed Description of the Mythologies of All the Great Nations of Asia*, London, 1932.
- Holmberg, U.; *Finn-Ugric, Siberian, the Mythology of all Races*, vol. IV, Boston, 1927.
- Jochelson, W.; *The Yakaghir and the Yakaghirized Tungus*, 3 parts, Jesup North Pacific Expedition, vol. IX, Publications of the American Museum of Natural History, New York, 1910-1926.
- Krappe, A. H.; *The Science of Folklore*, London, 1930.
- Kalevala, the Land of the Heroes, translated from the Finnish by W. F. Kirby in 2 vols, London and New York, 1936.
- Lang, A.; *Myth, Ritual and Religion*, 2 vols. London, 1913.
- Liu, Chungshue Hsien; "The Dog-ancestor Story of the Aboriginal Tribes of Southern China," in the *Journal of the Royal anthropological Institute of Great Britain and Ireland*, vol. LXII, London, 1932.
- Max Müller, W.; *Egyptian, the Mythology of All Races*, vol. XII, Boston, 1918.
- Perry, B. A.; *Megalithic Culture of Indonesia*, London, 1918.

Pitard, E.; *Race and History, an Ethnological Introduction to History*, New York, 1926.

Scott, J. G.; *Indo-chinese, the Mythology of All Races*, Boston, 1918.

Shirokogoroff, S. M.; (a) *Social Organization of the Northern Tungus*, Shanghai.

——; (b) *Psychomental Complex of the Tungus*, London, 1935.

Spence, L.; *An Introduction to Mythology*, London, 1921.